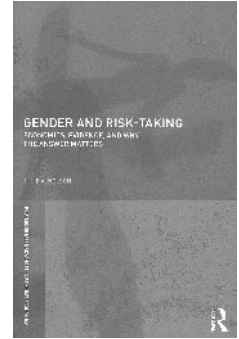


◆書評◆

Julie A. Nelson 著

Gender and Risk-taking
Economics, Evidence, and Why
The Answer Matters

(Routledge 2018年 ISBN: 978-1-138-28403-6 US\$34.42+税)



金井 郁

(埼玉大学 人文社会科学研究所)

「男性はリスクテイクするが、女性はリスク回避的」。最近、こんなフレーズを目にすることが多くないだろうか。特に2008年の世界的な金融危機でリーマンブラザーズが倒産した後は、「もしリーマンブラザーズがリーマンシスターズであったら同じような混乱は起きたか?」といった雑誌記事が掲載されたりしている。これは、「女性は男性に比べてリスク回避的」といったリスク選好に性差があるという議論を下敷きに、リスク回避的な女性が金融機関のマネジメントにいて金融市場が安定化するといった趣旨で議論されている。本書は、こういった議論に対して統計的にも解釈においても批判的な検討を加えるとともに、「リスク選好にジェンダー差がある」という言説が一人歩きすることによって、実際の社会における個々の女性や男性にいかなる影響を与えるのか、ジェンダー研究の蓄積から明らかにする。もちろん、著名なフェミニスト経済学者である著者のジュリー・ネルソン (Julie A. Nelson) は、金融機関のマネジメントに女性がいるべきと考えているが、それは「女性が

リスク回避的」な特性を持つからではない。

本書がまず力を注いで読者に伝えようとするのが、「男女に別個のリスク選好があるという質の高い実証的な論拠はあるのか?」についてである。この問いに答えるために、ネルソンが取った方法は、リスク選好にジェンダー差があるとする35の先行研究と投資行動にジェンダー差があるとする37の投資ゲーム研究を再検証する。その結果、個々人のレベルでの男性と女性にリスク選好のジェンダー差=GDI (gender difference at the individual level) があるとはいえないという。

では、なぜここまで「女性は男性に比べてリスク回避的」という言説が普及しているのだろうか。それは、筆者がGDA (gender difference in the aggregate) と呼ぶ「ある時、ある場所で検出される平均的なものとして検知できる男女のグループの特徴としての差」(14頁)があるからである。しかし、この男女の平均の差は、個人の特性については何も特定しない。平均の男性(女性)と比べたとき、個々の男性(女性)の振る舞いや特徴は異なるからだ。もしGDAに違いがあっても、

統計的に有意な差かどうかだけでなく、その差がどのくらい大きいのか（小さいのか）が重要であると指摘する。この点について、筆者は統計分析に対する理解度を高めるため、統計知識についての章をもうけて丁寧に説明する。

GDA は①ジェンダー間だけでなく、各ジェンダー内で変動（variation）がある、②ジェンダー間の分布は重複する、③分布の違いがGDAの差であって、個々人の違いの差ではない、といった3つの点に注意を促す。さらに統計分析の結果を読むときに、私たちは「統計的に有意」という言葉をしばしばみる。この「統計的に有意」とは、差が存在していることを断言するのに十分なデータ量があることを示している。したがって、「統計的に有意」であることは見つかった違いが大きいことや重要なことを意味しない。特に、研究者が十分なデータ量を分析していれば、平均の差は実質的にその差が小さかったり重要でなかったりしても統計的に有意になるのである。そこで、実質的に重要な問いに答えるには、2つのことをみる必要がある。それは、①ジェンダー間の割合か平均のギャップの大きさ、②分布が類似性の観点からどのくらい同じであるかである。

ネルソンがリスク選好にジェンダー差があるとする35の先行研究を再検証すると、男女間の分布の差が大きいというよりもむしろ男女間の分布の類似性が高いことが明らかになった。これを理解するために、男女間の平均的な背の高さの分布の違いと比べている。ある人が見知らぬ男性と見知らぬ女性に会う時、その男性が女性よりも背が高い

と推測することは多くの場合当たる(95%)。しかしネルソンが検討した先行研究で得られているジェンダーによる平均的なリスクテイクの差に関してみると、ある人が見知らぬ男性と見知らぬ女性に会う時、その男性が女性よりもリスクテイクする特性を持つ人である確率は55%である。

しかし、GDAによる差が少なくともあり、その結果が強調されてきたために、女性性の特徴としてのリスク回避選好、男性性の特徴としてのリスクテイク選好があるというステレオタイプが生まれ、こうした個々人のレベルの性別の特性として間違ったステレオタイプが雇用や他の分野において女性の妨げとなっているという。メディアの多くは、女性の「勇敢さ」の不足と経済や政治分野での活躍の低さを結び付けて語る傾向にある。さらにステレオタイプ化された信念や無意識のバイアスは、経済分野における女性の地位向上に深刻な障害になる。経営者がある仕事や昇進についてリスクを取ることが重要な要素と考えているとしたら、特性としてリスクを取ると考えられる「男性」を選ぶことになる。

理論的に深刻な問題として、家庭や家族、ケアなどは女性性と結びつけられる一方で、ビジネスや市場は「男性的」なものとして考えられてきたことを挙げる。この男性性と市場や経済分野が結びつけられることは2つの重要な副産物を生み出しているという。①男性のみが市場や企業の適切な参加者であるという信念で、権力から女性を排除することを合理化させることになる、②ステレオタイプ化された男性的なふるまいや価値、技能

のみが自然で適切であるという信念である。つまり、市場や企業の参加者は、成功するには個々人の利己的な動機付けが重要で、社会的な関係には多くの注意を払わず、リスクを取って競争的な振る舞いをするのが想定される。

さらにネルソンは、経済学は「女性的」と考えられる感情の議論を避けてきたことを指摘する。リスクテイクはしばしば文化的に男性性とみなされ経済生活に適しているが、感情は女性性とみなされ経済取引には適していないと記述されてきた。特に、おそれ(fear)を含めた多くの感情はステレオタイプの女性と結びつけられ、経済学において議論が回避されてきた。おそれ(fear)を無視することは、リスクを分析する能力を妨げ、金融市場の不安定性や環境破壊など脅威を扱うことの失敗を導くのである。

日本でもリスク選好とジェンダーについて同様に紹介されている。2014年12月4日付の日本経済新聞に行動経済学者の竹内幹氏が一般の読者向けに次のような文章を投稿している。少し長いが引用しよう。

「・・・どこまでのリスクなら許容するのか、人によってそれぞれです。そうしたリスク一般への態度を、経済学ではリスク選好と呼びます。例えば、50%の確率で1000円当たるクジか、それとも確実にX円もらうか、どちらかを選んでもらいます。X円が少ない金額でもクジを避けるのであればリスク回避的、

X円が高くてもクジを選ぶのであればリスク許容的といえます。この実験では、女性の方が男性に比べリスク回避的という結果が得られています。

職場で新しい仕事を自分から引き受けるのは、リスクが伴います。成功するかどうかはわかりません。成功すれば、やりがいのある仕事をまかされたり、昇進・昇給につながったりするでしょう。一方、失敗すれば責任をとらなければなりません。リスクのある仕事を引き受け、成功した者が昇進していく雇用環境では、リスク回避的な労働者はなかなか昇進できず、リスク選好が職場での地位に反映されます。これが男女の差異の一因とも考えられます。・・・」(竹内 2014)

短い新聞の投稿では、GDAとGDIは区別されず、女性＝リスク回避的、男性＝リスク許容的といった男女の分布の類似性に言及することなく2分法の解釈が行われる。ジェンダー化された2分法的解釈によって、女性の低い経済的地位を説明する可能性にも言及している。連載の最後には先天的に男女を2分する見方に偏見があることに留意する必要性を付け加えるが、注意深く読まないといけない。

私たち自身が統計知識を身につけるとともに、あらゆる研究が「実証する」ジェンダー差について文脈に配慮しながらジェンダーセンシティブに読み解いていく必要があることを本書は教えてくれる。

引用文献

竹内幹, 2014, 『第6章 男女の行動の違い(1) リスクの取り方に性差』日本経済新聞。

(掲載決定日: 2018年4月4日)